

## 三島由紀夫とミシェル・フーコー

### ——〈自己鍛錬〉の倫理についての比較——

福井裕之

はじめに

三島由紀夫（一九二五—七〇年）とミシェル・フーコー（一九二六—八四年）とのあいだには交流も言及もない。そうではあるものの両者は、以下のような位相において共通している。前者は日本の近代・戦後社会において、後者はキリスト教社会・西洋近代社会において、ニーチェをその思想の源流としながら、既成の道徳が人間の個性・多様な価値を実現する積極的な倫理であるどころか、形骸化した規則、受動的ニヒリズムに陥っていることを批判した。さらに、〈自己鍛錬〉による自己の主体化をあらたな倫理として提示した。そこで、両者の〈自己鍛錬〉の倫理とその背景・帰結とについて議論することにした。

#### 一 三島由紀夫の〈自己鍛錬〉

三島は、人生というのは、舞台、演技であるという前提に立つ。三島にとって、人生とは、自己の生を芸術作品に高めることなのである。そして、それ自体演技である自己の人生を告白することによって、自己の真実と自己の虚構との二項対立を攪乱しようとする。

この自己の生の芸術作品化は、文学青年による耽美的な妄想には還元できない。というのは、それは、ある種の積極的な倫理、本稿が〈自己鍛錬〉の倫理と呼ぶものに達しているからである。三島は、こう書いている。

「少年時代の自己鍛錬のつづきとして、私は煮え切らない人間、男らしくない人間、好悪のはっきりしない人間、愛することを知

らないで愛されたいとばかり願っている人間には、死んでもなりたくないと考えていた」[331]。

この文章からは、三島が「社会」と呼ぶもののより具体的な内容がうかがえる。三島にとって、「社会」とは、道徳上の積極的な目標を見失っているにもかかわらず、生殖中心主義、異性愛という画一的な観念に盲目に寄りかかってマイノリティを蔑視する（『禁色』[332-33]）人々、あるいは「愛することを知らないで愛されたいとばかり願っている」[331]人々、の集まりである。

このような「社会」に対して抵抗するものが、三島の〈自己鍛錬〉である。

そのかぎりにおいて、その〈自己鍛錬〉は、「欲求するものを欲求しない」、すなわち一次的な欲求を禁欲的に抑えるのではなく、「欲求せぬものを欲求する」すなわち欲せぬ対象への一次的な嫌悪感・偏見を捨て、欲望の新たな対象とすることになる。それゆえ、『仮面の告白』において、三島がなりたいた願うもの、すなわち演技の対象となるものは多岐にわたる。しかし、同性愛、サド・マゾヒズム、スカトロロジーといった、生殖上不毛な性現象にまつわるものを含め、「社会」から疎外された物・者ばかりである。

三島は、そういった他者との関係を求めてやまない。しかしながら、三島は、同時に、そういった対象と自己とが完全に重なり合い、他者になるという願望が満たされるとは考えなかった。す

なわち、その対象は、ニーチェ的な「悲劇的なもの」（ディオニュソス的なもの）、「よそよそしい充溢」と表現されるように、あくまで、三島は、「私は決して近江」なりたいた、愛されたいと願う対象・他者」に似ることはできない」[332]という確信（『仮面の告白』）に立っている。

以上から、さしあたり三島の自己鍛錬についてはこう言える。それは、他者との同一化を遂げることが不可能であることを知悉しながらも、なおも他者との関係における演技において自己を鍛錬していく倫理、ニーチェの言葉でいえば能動的ニヒリズムの一種だ、と。

なお、この能動的ニヒリズムは、ニーチェ同様、精神主義への批判とギリシア的なもの肯定へと行き着く。三島によれば、「キリスト教の考えるような精神的なものは何一つない」。希臘人の考え出した美の方法は、「生を再編成することである」[333]。アポロ的な生の個体化、自己の生の作品化を倫理の基準にしようとする。三島によれば、三島自身の古典主義的傾向は、最終的に「美しい作品を作ること、自分が美しいものになること」を、「同一の倫理規準」として発見すべきであり、「希臘人はその鍵を握っていた」[334]。三島自身が、「文体」の「自己改造」[335]に引き続き、「肉体的な存在感」を求めて、ボディビル、ボクシングを通じた自分の「肉体」の「改造」[336]に取り組んだ（『実感的スポーツ論』六四年）。

## 二 フーコーによる道徳批判

さて、ここでいったん議論の対象をフーコーへと移そう。フーコー流の道徳批判は、考古学的手法という方法論にもとづいている。その考古学的手法について乱暴にまとめてしまえば、それは、(ディオニュソスの・ギリシア悲劇的) 狂気・倒錯の立場から近代的理性(キリスト教、デカルト哲学、精神分析学など)の言説の集蔵庫を分析・相対化するだけではなく、それを通して、現代あるいは現代人が知によって人間へと弁証法的に形成されるにあたって、必然的に非知・狂気として排除され忘却される必要のあった地層を掘り起こすことになる作業、と言えらるだろう。このフーコーの方法論からは、六三年における彼の以下の言葉のとおり、ニーチェからの強い影響がうかがえる。「弁証法と人間学との絡み合った眠りからわれわれを覚めさせるためには、悲劇的なものとディオニュソス、神の死、哲学者の槌、鳩の歩みをもつて近づくと超人、そして(永遠回帰)といったニーチェ的な形象が必要だった」[DEI: 239]。

では、この考古学が明らかにしたもののはなんだったのか。この方法から書かれたフーコーの著作には『狂気の歴史』(六一年)、『臨床医学の誕生』(六三年)などがある。が、ここでは、『性の歴史Ⅰ 知への意志』(七六年)にかぎってその所説をまとめることとした。

一九世紀以降の知Ⅱ権力による性の言説化は、ある基本的な配慮に従って、現実の世界から、生殖という厳密な運用構造に従わない性的欲望の形態を追い出す。倒錯は、これまでのように倒錯として観念的に軽蔑的な評価を受け排除されるのではなく、知の多種多様な装置によって、身体や快楽そのものに干渉され、細分化され、定義(少年の性欲、同性愛、露出狂、など)を与えられる。そうすることで、人間は、唯一の正しい性現象を中心とした生産管理の体系に組み込まれ、主体化Ⅱ従属化されていく。その際、そもそもキリスト教の告解とその(牧人Ⅱ司祭型権力)「[Discours]」にその源を発する告白が、精神分析によって性の科学として高められた告白が、正常/倒錯の区別を人間に言説化させるとともに主体化Ⅱ従属化の装置を成立させる。

さて、考古学の批判の対照は明確である。フーコーは、三島の文学的想像力が「社会」と表象したものの根底に権力を見出していると言えり。ただし、考古学は、知Ⅱ権力の外に、それが排除したが、かつては自分の一部であった非知を見出す、という意味では、実践上なにか積極的な倫理を提示するものではない。しかし、フーコーは、系譜学的手法への転回を経たのち、理論的な位相上で三島の(自己鍛錬)の倫理と期せずして重なり合うような(自己鍛錬)を見出すことになる。

### 三 フーコーの〈自己鍛錬〉の倫理

『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』（八四年）以降、フーコーは、系譜学的手法を採る。考古学との対比において系譜学を定式化すると、それは、知の系譜上の起源ではあったが、現代あるいは現代人が人間へと弁証法的に形成されるにあたって、今は忘却・排除された、知の原点をたどる作業、である。フーコーは、知の権力の起源において見失われた知、「生存の美学」という〈自己鍛錬〉の倫理を系譜学によって見出すとする。

フーコーによれば、まず、一方に、キリスト教Ⅱ西洋近代テクノロジーの性道徳がある。それは、欲望とそれをめぐる浄化本意の解釈学を問題構成とする。しかしながら、他方、それ以前に遡って、古代ギリシア（ローマ）的「生存の美学」が存在する。そこで重視されるのは、「自己との関係の形式であり、それを磨き上げるさいの手順や技術であり、認識すべき客体としての自己へ専念するさいの鍛錬であり、自己自身の存在様式の変革を可能にしてくれる実践」【HS:377=40】である。すなわち、「生存の美学」とは、キリスト教とは異なり、権力と規範によって欲望を禁止・排除することによって主体を従属させるのではなく、自己が自己自身によりよき生を営むための、快楽の節制・調整・活用の技術を通して自己を主体化するためのものである。

「生存の美学」は、四つの次元において問われる。以下列挙する。まず、自己への関係においては、治療法ではなく養生法、次に、自己と異なる性への関係（異性愛）においては、夫婦間の忠実貞節、すなわち他の女との快楽の断念ではなく、家庭管理の術、妻の特権の維持、第三に、自己と同じ性への関係（同性愛）若者愛においては、同性愛の禁止に対して、若者という快楽の客体を自分の快楽のまま客体にしておくのではなく、青年を快楽の主体へと形成してやる恋愛術、最後に、真理への関係においては、キリスト教的な自己告白／自己の解説に対して、自分自身に対する生存の節度、妻に対する生存の節度、若者に対する生存の節度、という以上三点への問い、である。

もちろん、このような倫理は、ごく少数の自由な青年男性にしか許されなかったこと、そして女性や奴隷についての「苛酷な体系」に立脚していたことに、その限界があったという点については、フーコーも認めるところである。それにもかかわらず、すでに見たような快楽の活用についての熟慮に富む自己鍛錬は、まず自己の自己に対する関係を目的としながらも、愛欲の営みと結びついた他者への関係をも本質的に内包している。それゆえに、フーコーにとって、自己の生を芸術作品にすることは、当然、成人男性が自身の特権的な自由や権力が社会的弱者／相手の自由や権力や快楽を蹂躪せぬように、自身に厳しく掣肘を加えるものである。フーコーは、このような倫理が、紀元後のローマを経て

徐々に変容し、キリスト教のローマへの登場によって道徳によって決定的に取って代わられたものの、たしかに西洋近代の源流であったと結論づけた。さらに、そこから、現代のわれわれが近代的な知「権力へと抵抗するための有効な倫理をも導き出せると考えたのである。

#### 四 三島における〈自己鍛錬〉上の転回

もちろん、二人の依拠するものがかたや文学的な想像・直観、かたや歴史学的な実証という違いこそあれ、それぞれから看取してきたのは、ニーチェの道徳批判を源流とし、以下のような諸要素を共有する〈自己鍛錬〉の倫理である。すなわち、まず、「精神」や「真理の告白」という禁欲的道德原理からの肉体、行動や快楽の解放、第二に、夫婦中心・生殖中心の家庭観念・性道徳の批判、第三、現代の性道徳に管理・抑圧された同性愛あるいは同性愛的共同体の復権、第四に、ギリシア的なものへの憧憬、第五に、自己鍛錬の美学性、という諸要素である。

とはいえ、三島にはその後変化が訪れる。以下、それについて『太陽と鉄』を中心にまとめていく。

まず、三島は、言葉を用いた文学による自己作品化、「知的教養」という形式だけの自己鍛錬に限界を見出し、すでに見たように、「造形美に充ちた無言の肉体」[32:71]を求め、「鉄」による自己の肉体的鍛錬、「肉体的教養」を決意した。しかしながら、

〈肉体は精神を超えられない〉という結論、三島みずからが「肉体的教養」を行いつづけることに限界を感じる。

次に、それと関連して、三島は、以下のように考えるようになる。すなわち、死を暗示する肉体の「受苦」[33:23]の経験こそが、(ディオニュッソス的)生と陶酔についての意識を最後までつなぎとめるものであり、自己を芸術作品にする間道である、と。

そして、三島は、男という主体と美という客体とはそもそも相反する、とも考えるようになる。そして、「男の美」や「行動の美」という逆説的な事態、男が美という客体になるという事態は、かろうじて「絶対の孤独、悲劇性」や「壮烈な死」という「花火」に現れるにすぎない[33:89][34:232-234]という。

以上の三点のかぎり、三島の〈自己鍛錬〉の美学は、『仮面の告白』やそれ以前にもまったく見られぬ傾向ではなかったものの、当初見られたとはまったく異なり、人間の生を完全に否定的にとらえていくことになる。すなわち、三島にとって、自己の生を芸術作品として生き抜く〈自己鍛錬〉を成し遂げるためには、早めに死を迎えること、精神が肉体に死を与えることが必須の条件となる。

さらに、三島の〈自己鍛錬〉に見られる死への欲動は、日本回帰と平行して進んでいる。三島は、ボクシングでの挫折以後、剣道の野卑な叫び声に「『日本』の叫び」と「精神主義」の風味「[33:86]」を見出し、ここで三島という精神とは、自意識と

行動、認識・芸術と実践、虚構と真実、という西洋的ニ項対立以前にあるような精神のことである。

三島は、そのような日本を、日本の近代のインテリがきわものとして排除した思想（日本陽明学や平田篤胤の国学）に求め、それらの積極的な再読を図る。とりわけ、自ら「ウトーピッシュな思想」という、狂死と行動の美学、『葉隠』の世界に理想郷を求める。「ギリシャ時代に美が倫理と結合したように、『葉隠』の世界でも、ここに至って美ということが道德の基本的な性格を規定するのである」[33:103]。「日本文化は行動様式自体を芸術作品化する特殊な伝統を持っている。（中略）武士道は、このような、倫理の美化、あるいは美の倫理化の体系であり、生活と芸術の一致である」[33:103]。この点、三島は、明治の文明開化以後、モダニズムが浸透するなか、日本人が忘れ去った〈自己鍛錬〉の倫理、の地層を掘り起こすという意味で、彼なりの考古学を行っていると言ってよいだろう。その過程で三島が結局たどり着いたのは、「文」≡知的教養も、「武」≡肉体的教養も実際は「自分を減ぼすようになる技術」にすぎないということだった。それにもかかわらず、かつての自分は「自己をいかにあらわすか、ということよりも、いかに隠すか、という方法」[33:112]を考えていた。それゆえ、三島はこう言う、「私は獨創性を否定しながら、どこかで私の生自体の独自性を肯定する矛盾を犯していた」[「同・同」]と。すなわち、三島は、かつての自身の〈自己鍛錬〉のあり方を

はっきりと批判する。

それに伴って、「悲劇的なもの」の概念も、三島のなかではっきりと変化していく。いまや、それは、神輿担ぎの陶酔や軍隊経験の陶酔のなかに表れる、「定着された同一性」、アポロ的な言葉と個性の喪失、「絶対」、「陶酔」、「同苦」、「集団の悲劇」、「戦士共同体」[33:103]と規定される。それは、定着した自己の同一性であるだけでなく、他者とのある種の和解である。ここでは天皇の占める位置については詳しく議論できない。が、そういった前提のもとで、三島の究極の目的が、肉体の鍛錬とそこから生じる受苦の経験によって自らの自意識を最高度にまでつなぎとめるとともに破綻させ、彼が「見返す存在」という死と、集団のほかの成員とに見守られるなかで、「造形美に充ちた無言の肉体」[33:111]として自己を完成することに移り変わったとは言える。

#### おわりに

思想史学の次元での学究性の有無はさておいても、それぞれがどの程度初発の動機を貫徹しえたのか、いわば、ニーチェの道德批判の可能性をどの程度開花させ、一元的な価値観とそれへの従属とに抵抗し、そのなかで自分をそれと異なる倫理の主体として構成しえたか、という観点から、三島、フーコーそれぞれに対する本稿の評価を簡潔に述べて拙稿を締めくくりたい。

三島については、これまでもしぎりに「死の美学」として論じ

られてきた。それに対して、本稿は、『仮面の告白』や『禁色』を中心として、フーコーとの比較を通じ、三島のなかに、〈自己鍛錬〉というある積極的な倫理を見出そうと試みた。三島は、生と死、文学の訓練と肉体の訓練、言葉と沈黙、個別と普遍、文と武、見ると見られる、認識と行動、男と美（女）、西洋と日本などさまざまな矛盾、対立を議論した。しかし、そのなかで三島が最後にたどりついた思考方法は、それが転覆してみせようとした価値観に順応してしまっている。そう本稿が判断する根拠は、以下のとおりである。

まず、三島の美と狂死の美学は、二項を明瞭に対立させてしまうことの正統性そのものを斥けられず、劣等感を抱きながら、死を通じて、そのうちの貶められていたほうを逆にもちあげているにすぎない。それが端的に表れているのは、三島が、結局、若さと老い、男と女、認識と行動、常識と倒錯という二項対立的階層秩序を愚直に信じ込んで自らを前者から離れられない人間とみなして卑下してしまう点において、である。次に、その結果、その思考方法の根底は、ニーチェ『悲劇の誕生』の言葉でいえば、意外にも「ソクラテス美学」、おそらく弁証法に非常に近い。それが端的に表れているのは、三島が、死の共同体に陶醉する永遠の瞬間という終局の同一性において両者の対立を超克・統一しようとするという点や、ドイツ語の Bildung を思わせる「教養」(Bildung) という言葉によって〈自己鍛錬〉をとらえていく点に

おいて、である。それゆえに、三島の〈自己鍛錬〉は、表面上は破壊的に見えても、自身が当初問題にした二項対立的階層秩序、すなわち「社会」を正統化している。そのうえで、「社会」とそれを超えられない自分とへの無意識の苛立ちの結果として自己の生存を放棄するがゆえに、現実上有効な倫理とはなりえないだろう。

それに対して、フーコーの「自己形成の系譜学」においては、〈自己鍛錬〉の倫理は、まず、あくまで自己の生存に根ざしながら他者との関係にかかわって実践される。さらに、たえず自己を適宜微妙に変革していくその実践の主体は、抑圧的な二項対立的階層秩序に従属することなく抵抗し続ける。以上の点で、フーコーの〈自己鍛錬〉のほうが、より積極的な倫理であり続けるだろう。

\*三島由紀夫の著作からの引用・参照は、『三島由紀夫全集』(全三六巻、新潮社、一九七三—七六年)により、ローマ字で巻数、算数字で頁数を文中に示した。旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

\*ミシェル・フーコーの著作からの引用・参照は、以下の略号を用い、ローマ字で巻数、算数字で原書の頁数と邦訳のあるものについてはその頁数を符号に続けて文中に示した。

HS = *Histoire de la sexualité*, Paris: Éditions Gallimard, 1—III, 1976—84. = 渡辺・田村訳『性の歴史』全三巻、新潮社、一九八六年。

DE = *Dices et écrits: 1954-1988*, Paris: Éditions Gallimard, 1994.

【参考文献】

Halperin, David M. *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*,  
Oxford: Oxford University Press, 1995.

河村政敏『滅びの美学——太宰治と三島由紀夫』至文堂、一九九四年。

村松剛『三島由紀夫の世界』新潮文庫、一九九六年、初版一九九〇年。

永井均『魂』に対する態度、勁草書房、一九九一年。

青海健『三島由紀夫とニーチェ』青弓社、一九九二年。

田坂昂『三島由紀夫入門——三島美学の核心と作品にみるその構造』オ  
リジン出版センター、一九八五年。

山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』海燕書房、一九七八年、  
第二版。

渡辺みえこ『女のいない死の楽園——供儀の身体・三島由紀夫』バンド  
ラ、一九九七年。

（ふくい・ひろゆき、近世・近代日本思想史、

日本学術振興会特別研究員）